

グラブの時代—『砂漠の支配者』の読解と研究課題—

新妻 仁一

初めに

20世紀初頭の東アラブ世界、特に歴史的シリアとして知られるシャーム地域の政情、また西欧各国の対中東政策についてはこれまで様々な視点から多くの研究がなされてきた。パレスチナ問題の発生に向けての分岐点となる中東の分割からイスラエルの建国にいたるこの時代は、現在中東世界に発生する多くの政治潮流の土壌を形成する激動の時代でもあり、中東研究者にとって当該地域へのアプローチの上で避けて通ることのできない時代といっても過言ではない。そうした様々な視点にまだ欠けているものがあるとするればそれは何であろうか。それはこの時代に対するアラブ人の視点、アラブ人の評価に配慮しつつこの時代を振り返ることであろう。アラブ世界における歴史の再評価問題は、アラブ人のアイデンティティの問題と直結する問題である。彼らはこの問題をどのように位置づけているのであろうか。

2009年、ヨルダンのアンマンのバシール出版 (dar al-bashir) から『砂漠の支配者 (Iurid al-SaHra')』が出版された。著者は、ヨルダン大学、政治学教授、サアド・アブー・ディヤ (saAd abu-Diyah, 以下アブー・ディヤ) である。英人将校ジョン・バゴト・グラブの文書研究と副題に示されているように、著者は、オックスフォード大学のセントアントニーカレッジの中東センターに保管されていたグラブ関連の資料を精査し、グラブという人物の活動、その時代背景の分析を通じてヨルダンと英国の中東政策、そしてヨルダンと近隣諸国の関係についてこれまで埋もれていた多くの事実を明らかにした。本書の最大の特徴は、アブー・ディヤ自身が序文で明言しているように「アラブ人の視点を示し、グラブがその中で生きてと同様の状況の中で生きて一人のヨルダン人研究者の手によるアラビア語で書かれた初めての研

究¹⁾にある。すなわち本書は、アラブ人の手によるアラブ史の再評価の試みの一つとみなすことができる²⁾。

歴史的シリア、すなわちシャーム地域は、現在のシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ（現在は、イスラエルと分割）をさす言葉であるが、その近現代史を専門とする筆者にとり、アブー・ディヤの研究は、激動の時代に関するアラブ人の問題意識と手法をさぐるうえで重要な視点を提供している。本稿は、アブー・ディヤの『砂漠の支配者』の読解を通じて、そこに見出される重要な事実を確認しつつ、今後のシャーム地域の研究に新たな方向を見出すことを目標とするものである。

1 グラブとは誰か

ジョン・バゴト・グラブ (John Bagot Glubb, 1897～1986) とは、どんな人物か。国軍司令官として、また本国政府による任命ではなく、ヨルダンという国家との直接契約によって職務を果たすという特異な地位を保ったこの人物、グラブが過ごした時間の長さや政治的役割を見ればその重要性は事実上その活動が、国家誕生以前のプランニング段階にあったアラビアのロレンスとして知られるトーマス・エドワード・ロレンスやイラク建国の母と呼ばれるガートルード・ベルらよりもはるかに大きいというべきである。しかし一種の伝説と化した活動をバックに注目をあびる両者に比してグラブの活動はこれまで本格的な研究対象とはならなかった。グラブとは誰か。ヨルダン軍を創設し、パレスチナ戦争やアラブ民族主義の嵐の中でヨルダンという人造国家の延命に重要な役割を果たしたこの人物についてはその多くがまだ明らかにされていない。

ロレンスやベルら現在のアラブ国家が誕生する激動期に英国の中東政策の立案に関わった多くの人物は軍人であり、研究者であり、また政治家であった。さらに加えれば、彼らは大いなる夢想家であり、冒険家でもあった。彼らは、その時々において課せられた役割を見事にこなしていった。しかしロ

レンスもベルも、分割による国家誕生の瞬間に立ち会ったものの、その国家が国家の体をなしていく過程を確認することはできなかった。対フランス関係や対アメリカ関係の変化の中で英国の影響力を保持していくために誕生させられていった東アラブの国々は、その後英国の存在感の低下によって国家存続の危機に何度も遭遇することになる。特に1947年のイスラエルの建国はこうしたアラブ諸国の国家戦略を根本から揺るがす大きな契機であった。英国からの全面的な支援なくしてはその存続を維持することができなかったヨルダンにとって、西岸の併合、すなわちイスラエルと直接国境を接することが現実となったことは、ヨルダンの生命線がイスラエルという強大な軍をバックにもつ地域大国に握られたことを意味した。グラブは、アラブ近代史を二分するイスラエルの建国という事態とその前後の時期を体験した数少ない人物である。彼は、国家誕生の瞬間に立ち会うことはなかったが、国家が国家の体をなしていく過程を体験したのである。それどころか彼自身が国家であったということさえ可能かもしれない。そのようなグラブという人物についてどんなことが知られているであろうか。まずは人名事典で確認してみたい。

グラブの父フレデリック・グラブは、サーの称号をもつ陸軍少将 (Major General) であった。グラブは父と同様にチェルテナム、そして王立軍事アカデミー (ウリッジ陸軍士官学校) で学んだ。第一次大戦中、グラブは、フランスで勤務に就き1920年にイラクへ派遣された。彼はそこでおおよそ10年間、新生ファイサル王国のもとで軍務に就くことになる。6年後彼は、軍務を辞し、英国保護領の事務スタッフの職についた。イラク南部の視察官として、グラブの主たる任務は、イブン・サウドに率いられたワッハーブ運動の影響を受けた部族によるアラビア半島からの攻撃や略奪行為を防ぐため遊牧民部隊を編成することであった。この時代彼が獲得したアラビア語能力や遊牧民の生活習慣や彼らの価値観に関する知識は、その後彼がヨルダンへ移った後、彼の最大の武器となった。

1930年グラブ大尉 (Captain) は、やはりアラビア半島からワッハーブ派

遊牧民の攻撃に苦しめられていたトランスヨルダンへ向かった。ヨルダンではすでにピーク・パシャ（パシャはオスマン朝時代の高官に用いられていた称号）と呼ばれていた英人将校が率いるアラブ軍団（Arab Legion）が編成されていたがその兵士には遊牧民出身者はほとんどいなかった。ピークの第二司令官としてグラブはアラブ軍団に参加し、1939年からは、司令官となった。その後グラブは、憲兵隊よりも小規模の組織だった軍団をアラブ軍の中でも最も訓練された効率的な軍隊へと成長させた。遊牧民を徴兵し、訓練し、忠誠心あふれる市民として育成したことはグラブの功績のなかでも第一に挙げられるべきものである。またグラブの存在を特異なものにしているのは、その政治的手腕である。人造国家ヨルダンの支えとして初代アブドゥラー国王の信任を得て、彼はハーシム王朝の存続を最優先課題として位置づけていた。その結果、グラブは、トランスヨルダン政府との直接契約に基づき任務を遂行し、本国英国とは一定の距離を保つことになった。この立場は、ヨルダンへ財政援助を行う本国政府との間で後に微妙な影響を及ぼすことになる。

1948年、イスラエルの建国宣言に始まる第一次中東戦争においてグラブの率いるアラブ軍団（ヨルダン正規軍）は、イスラエルと互角に戦った唯一の軍隊となった。しかし結果的にリッダ、ラムラの陥落、さらに西エルサレムの掌握に失敗したことに對して、グラブは、アラブ民族主義者から、パレスチナをトランスヨルダンとユダヤ教徒で分割する英国のプランにそってアラブ軍団の作戦を故意に抑制した、と激しい非難を浴びることになった。グラブは、この戦争を機にヨルダン川西岸を併合し拡大したハーシム王国の防衛計画を作成することになる。彼の狙いは、併合によって直接国境を接することになったイスラエルとの緊張関係の軽減、国境上でのヨルダン軍とイスラエル軍との衝突をさけるためにパレスチナ人のヨルダン側からのイスラエル侵入を抑制することであった。そのため国内外のアラブ民族主義者たちはグラブを英国支配のシンボルとみなし続けた。1956年3月、フセイン国王は突然グラブを指令官の地位から解任し、代わりにヨルダン人を参謀総長に

任命した。グラブの解任によって、ヨルダンも真の独立への道を進むことになった。解任後グラブは英国へ戻りその後多くの著作を著した。

彼の著作には、『アラブ軍の物語』(1948)『アラブ人と一緒にの兵士』(自伝、1957)『英国とアラブ』(1958)『砂漠の戦争』(1960)『偉大なアラブの征服』(1963)『アラブ帝国』(1963)『帝国の道筋』(1965)『失われた世紀』(1967)『シリア、レバノン、ヨルダン』(1967)『アラブ人の歴史概観』(1969)『ムハンマドの生涯と時代』(1970)『聖地における平和』(1971)『幸運の兵士たち』(1973)『愛の道』(1974)『ハールーン・アッラシード』(1976)『戦闘の中へ、大戦争での兵士の日記』(1977)『アラブの冒険』(1978)『生きる目的』(1979)『人生の変化する舞台』(1983)があるが、1957年の『アラブ人と一緒にの兵士』は彼の自伝でもあり最も重要な著作とみなされている。またアラブ軍団でグラブの元で働いた英人将校ジェームズ・ラントは、1984年に伝記『グラブ・パシャ』を著わしている³⁾。

また別の人名事典は、前述の情報に加え、ヨルダンでは1948年から参謀総長となり将軍(ファリーク)の称号をもつ、またパレスチナ戦争でのウンム・ラシュラ(現在のエイラート)からの撤退によって彼は非難された、英国へ帰国後アラブ・イスラエル闘争においては親アラブの立場で著作を著した、などと紹介している⁴⁾。

またフランスの歴史家ブノアメシャンは、1939年、イラクで発生したラシード・アル・ガイラーニーの反英クーデターの鎮圧作戦におけるグラブの活動について言及している。グラブは、ヨルダンからアラブ軍団を引き連れこの作戦を側面から支援した。ブノアメシャンは、「灰色がかった金髪をざんざんにし、砂の色をした口ひげをもち、顔の片隅に深い刀傷のある、これはアブー・フネイク(あご親父)というアラビア語のあだ名にふさわしいが、この赤ら顔のずんぐりした男グラブ・パシャは、イギリスが権益擁護のために時おりオリエントに派遣して、もしあまり評判が悪くなると知らん顔を決めこんでしまう、大胆な冒険的な人物の一人であった」と述べ、さらにこの作戦で英軍部隊に従軍したサマセット・ド・チェア(小説家)の言葉を

「ロレンスの評判は、著書、新聞、映画などの宣伝のせいで、事後になってはじめて広まっただけだが、彼の名は近東では引き合いに出すにはよい名であるが、グラブ、アブー・フネイクは、まさにオリент自身であった」と引用している⁵⁾。

2 アラブ人の視点からみるグラブ

以上のようにグラブに関する記述は、第一次中東戦争の軍事作戦をめぐる彼に対する非難を初めとして主にヨルダン司令官としての彼の活動に重点が置かれている。アブー・ディヤは、こうした記述やこれまでのグラブに関する先行研究をグラブの活動の重要な側面を無視してきたと批判する。アブー・ディアの研究はこれまでまったくといってよいほど明らかにされてこなかった重要な側面として、例えばアラビア半島の政治運動（イブン・ラファード革命との関係やファイサル・ドウェイシュとの関係）、またイラク石油との関係、周辺市域（シリアやレバノン）での活動、遊牧民の将校との関係、（アラブ軍団の）アラブ人化以後の自己弁護、アラブ人化におけるアメリカの役割、グラブの契約、などに言及する。なぜこうした点が無視されたのであろう。アブー・ディヤはその理由を研究者の立場、姿勢にあるとする⁶⁾。言い換えればこれまでのグラブ研究にはアラブ人としての視点が欠けていたということである。

アラブ人が自らの歴史をアラブ人としてどうみなすか、アラブ史の再検討問題は、アラブ人のアイデンティティをめぐる問題として注目を浴びてきた。その成果は、日本でもアミン・マールーフ『アラブが見た十字軍』（1986）、スレイマン・ムーサーの『アラブが見たアラビアのロレンス』（1988）として紹介されている。アラブ人が自らの歴史を振り返るとき、そこに多くの英雄を見出す。しかしこれらの時代の寵児の部隊は往々にして西欧の歴史観によって準備されたものであった。スレイマン・ムーサーは、「このような舞台設定にアラブはなんの係わりを持たない。彼らはそうした

方法で英雄を作り上げることに関心はなかった。彼らはこの奇妙な英雄と奇妙な行為を結びつける諸説には疑問を抱き、とくにロレンスがアラブの献身的な友人だとする説には首をかしげたのである」⁷とロレンスをめぐって西欧世界が感じる歴史認識とアラブ人のそれとのずれについて表明している。

『砂漠の支配者』の中でアブー・ディヤは、先行研究に対する批判については多くを割いていないが、冒頭で述べたようにアラブ人の視点による歴史の再評価として自身の研究の独自性をつらぬくことに主眼が置かれている。そこから描かれるグラブ像に我々は何を見出すのであろうか。またアブー・ディヤが見出した新資料、オックスフォード大学のセントアントニーカレッジの中東センターに「Memoranda, Reports, and Telegrams correspondence relating to Iraq, Palestine and Trans Jordan 1920 ~ 1950」というタイトルで14箱に収められていた資料の分析にアラブ人の視点をどう反映させたのであろうか。

グラブに関してアラブ人が知りうる資料として、アブー・ディヤは、2001年にカルタース書店から出版された『砂漠の戦争』についてふれている。グラブの息子、ファーリス・ブン・グラブが校訂を担当した1960年出版の同タイトルのアラビア語版であるが、ファーリスは、父親に関して何も新しい事実を提示することはなかった。また2003年6月1日にジャズイーラチャンネルが彼と行ったインタビューにおいても同様であった。アブー・ディヤは、彼自身が分析したグラブの手紙やファイルをファーリスが読んでいないように感じた、と述べている⁸。この意味でも『砂漠の支配者』は、グラブと同時代に生きたアラブ人がこれまで日の目を見なかった資料を読み解き、また英人将校やアラブ人たちとの面談を通じてグラブという特異な人物の姿を描き出すとともにヨルダンおよび周辺地域の歴史に新たなページを開いたものとして重要な位置を占めるものであろう。

3 『砂漠の支配者』とは

『砂漠の支配者』は、序文をのぞき全5部、22章から成っている。各部のタイトルは、以下の通りである。第1部、イラクでのスタート（第1章～5章）、第2部、ナジュドとヒジャーズにおける反乱（第6章～第7章）、第3部、グラブと遊牧民とヨルダン国外の部族（第8章～第13章）、第4部、グラブとタラール国王（第14章～第18章）、第5部、自らに向けられた嫌疑を前に自己弁護するグラブ（第19章～22章）。

第1部ではグラブが中東において第一歩を踏み出すイラクでの活動とヨルダンへ移った背景について分析されている。そしてヨルダン軍の母体となるアラブ軍団の編成に至る過程がグラブの遊牧民に対する姿勢とともに明らかにされている。第2部では、アラビア半島における政情に焦点が当てられている。南部に広がるアラビア半島の政情は、ヨルダンにとり国の命運を左右する大きな要因であった。サウド家が台頭するなか、アラビア半島や周辺地域の諸部族間の関係の変化はアラビア半島の歴史に新たな光を当てることになった。第3部は、グラブ個人の気質、特に遊牧民との関係で彼が見せた特異な能力がテーマとなっている。国家への統合のシンボルとしての軍、そのヨルダン軍の創設に当たって、彼の遊牧民に対する姿勢が大きな成果をもたらしたこと、同時にヨルダン周辺の部族に対する彼の関心の高さが示されている。また第二次世界大戦後の東アラブ世界の変動、特に第一次中東戦争におけるヨルダン軍の働きとグラブの指揮をめぐる議論についてこれまで指摘されなかった事実が明らかにされている。第4部は、まさに英国の權益を代表する機関としてのヨルダン国家が直面する諸問題とグラブの立場の変化について論じられている。特にエジプトの政変、自由将校団の影響力がヨルダン軍内に及ぶ時期であり、ヨルダンが生き残りをかけた対英国政策とグラブ、そして国王との関係が明らかにされている。第5部は、第一次中東戦争での指揮や自由将校団の運動の拡大をめぐるグラブに向けられた嫌疑、批判に対するグラブ自身の弁明、最終的にグラブを解任するに至るフセイン国

王との関係がテーマとなっている。本書のテーマでもあるアラブを愛し、アラブ文化に親しんだアラブという人物の個人的側面と英国の政策の代弁者としてのアラブの役割をどう理解すべきかが問いかけている。『砂漠の支配者』は、付属資料を含めるとおよそ 350 ページを超える分量であり多くの問題を提示しているが、本稿ではまず第 1 部、約 80 ページの読解を通じて浮き上がった事実と問題意識を指摘し、今後の研究課題を見出していくこととする。

4 イラクのアラブ

第 1 部ではイラクやヨルダンにおける英人将校の活動が分析され、ヨルダンという英国による人造国家が軍隊の編成と教育を通じて一定のアイデンティティを共有する市民を砂漠の遊牧民の中に育成していく過程が詳細に明らかにされている。1920 年 4 月のサンレモ会議によって中東の分割が決定されるとシヤム地域の現代史は複雑な展開をみせる。英国にとっては、まず 7 月にダマスカスのアラブ政府を軍力によって崩壊させ、統一シリアの王位を約束されていたファイサルを追放したフランスをいかに刺激せずにその権益を維持するかが緊急課題となった。イラクは英国の委任統治下に入るが反英運動が勃発するとすかさず英国は、1920 年 10 月にはイラクに臨時政府を樹立した。1921 年 3 月にはカイロ会議が植民地相チャーチルによって開催され、英国はイラクの独立を認め同盟関係を結んでその影響力を維持するという政策に方向転換を行った。同時に英国は、シリア南部を分割しイラクの王として予定していた兄のアブドゥラー皇子を王とすべくトランスヨルダンを建国した。一方ダマスカスを追われた弟ファイサルは、1921 年 8 月、イラク王として迎えられた⁹⁾。

アブー・ディヤは、英仏の権益が絡み合ったこの地域、特に現代ヨルダン史上象徴的な出来事としてパレスチナの英国高等弁務官であったバーバード・サムウエルのサルト訪問を取り上げる。サムウエルは、パレスチナとヨ

ルダンを統合することを目指していたが、ヨルダンをパレスチナから分離させ、英国は同盟国としてヨルダンを支えるというロンドンの政策に従い、1920年8月サルト¹⁰を訪問した。その際にサムウェルが残したのが6人の英人将校であった。そして同年10月、7番目の将校としてエルサレムから派遣されてきたのが前述の人名事典ではピーク・パシヤと記されている人物、フレデリック・ピークであった。6人が主に警察業務に従事したのに対してピークはヨルダン軍の創設に携わることになった。彼が創設した自動車部隊は、後ヨルダン軍の中核としてヨルダン全土の治安維持に当たることになる。ヨルダンでの英人将校の当面の目標は、前述のようにシリアを占領中のフランスを刺激しないことであった。ヨルダン王となるアブドッラー皇子は、シリアをフランスから解放することを目指して、1920年11月にマアーン（ヨルダン）に到着しており、英国にとってシリアとパレスチナの混乱に拍車がかかることは、どうしても避けなければならないことであった。1921年3月、チャーチルは、カイロ会議の決定を携えて、アブドッラーとエルサレムで会談し、後者は、ヨルダンに留まりそこでアンマンを首都とする政府の樹立を受け入れた。ピークは、北部のクーラの反乱（1921）を契機に彼の部隊を本格的な軍隊へ発展解消させることになる¹¹。アラブ軍団として知られる軍隊の誕生である。そしてこのころクラブはまだイラクにいた。

クラブがイラクへ向かう契機となったものは何か。アブー・ディヤは、1920年、英国がイラクでの部族反乱に対応するために志願将校を募集したのがその契機であると指摘する。植民地相に就任したチャーチルは、イラクから一部の兵士を撤収させるに伴い、代わりに空軍の増強をはかった。クラブはこの募集に応じてイラクに向かったのである¹²。

ヨルダンでの活動に比べて我々は、イラクでのクラブの活動を知る手段をもたない。その理由は、クラブ自身が自らのイラク勤務時代について多くを語っていないからである。アブー・ディヤは、その理由を反英の雰囲気があったようイラクにおける彼の任務が軍人としてのそれに限定されていたのに対して、ヨルダンでは英国がその主導権を発揮できたこと、またクラブ個人に

とってはアブドッラー皇子との関係により自由な活動領域が与えられたためであろうと指摘している。それを示すのが1928年11月16日付のイステクラーレ（独立）紙で、アリー・マフムードという弁護士が記した「砂漠の支配者（sayyid al-SaHra'）」と題した論評である。マフムードは、グラブが諜報活動と空軍部門における専門家であり、今後の活躍が期待できる人物であり、語る前に考え、語る時にはあせらない、またこの地域における大英帝国の利益にとって優秀なエージェントである、などと英国との関係を含めてグラブを称えているのである¹³⁾。この文言から我々は、ヨルダンにおける英国の政策が一定の成果をあげていること、その結果、グラブが英国の権益のために働いている人物であることを承知のうえで英国の支援に期待をよせているヨルダン市民の複雑な感情を読み取ることができる。

イラクにおける英人将校の役割はイラクがファイサル王の立憲君主制国家として歩み始めた直後、1921年10月に英国が締結させた英・イラク条約、その軍事に関する付帯協定で確認することができる。付帯協定は、英国が4年以内に国内秩序の確立と外国からの攻撃に対処するための守備隊や地方軍を国内に配置する、英の軍指導者は、必要に応じてイラク軍の検閲を行い、両軍が共同する場合には英人将校が全軍の指揮をとることを規定していた¹⁴⁾。英国は軍事と外交を事実上掌握することによってイラクをコントロールしたのである。

アブー・ディヤは、グラブを初めとした英人将校が情報収集のためイラク各地を探索し、グラブ自身は、シリア国境のアブー・カマルからバスラまでをカバーし、遊牧民と交わることによって大いに経験を深めたことを指摘している¹⁵⁾。

グラブが遊牧民との親密な関係を築くことに全力をあげた背景にアラビア半島におけるワッハーブ運動の進展とイラク南部に対する掠奪があった。イラク南部の部族は比較的裕福な部族が多く、常に周辺部族から攻撃の危険にさらされていた。こうした掠奪を阻止するために英国は空軍を用いるがその成果はかんばしくなく、グラブは、1926年からイラク人の軍事訓練にとり

かかった。グラブが100人からなる部隊を編成した矢先、ロンドンでは、海外での生活が5年を経過したとして彼に帰国を命じた。グラブは命令を拒否する。彼は辞任するが、イラク人は、彼を顧問としてイラクの地にとどめ、2年後、彼は砂漠地域の行政検査官となっていた¹⁶⁾。

グラブは砂漠での部族抗争を調停する検査官として大きな権力を与えられ、部族は砂漠を英人の土地と呼ぶほどになっていたが、その権威は、イラク政府との対立を招くことになった。砂漠の遊牧民にとってバグダードの政府には何の権威もなかったのである。砂漠の治安問題は、ワッハブ運動の脅威とともにイラク石油のパイプラインのヨルダン延長問題としてイラク政府にとり最重要課題となっていた¹⁷⁾。

グラブがその後ヨルダンへ向かい、アラブ軍団の司令官となるまでの道で特記すべきは彼の遊牧民に対する姿勢とアプローチの仕方であろう。それまでの英人将校が主に都市部内での活動、行政、軍事アドバイザーとして活動していたのに対し、グラブは積極的に遊牧民に接し、彼らの言語、価値観、生活習慣に精通し、遊牧民からアブー・フナイク（あご親父）というあだ名で呼ばれるほどに彼らの社会に入り込んでいた。遊牧民に対する彼の独特なアプローチはイラクでのドライム族との交流を通じて培われたものであった。グラブは、自身の経験を「私は、彼ら（遊牧民）と彼らの言語で理解し合うことを余儀なくされた。アラブ人（遊牧民）は、知られているように心の良い人たちである。であるから彼らは私を彼らの家、毛の家（テント）に招いてくれた。そのおかげで私は、人々が言うように言語を学ぶ上で最も良い方法で言語を学ぶことができた。それはその言葉を話す人々と交わりなさいというものである」と語っている¹⁸⁾。グラブにとってイラクの砂漠は、遊牧民について学ぶ学校であったのである。

5 中東とインド

こうしたグラブの姿勢の背景には何があったのであろうか。アブー・ディ

ヤの分析によって、我々は見落としがちなるある国の存在に気がつかされるのである。アブー・ディヤは、クラブの活動には、英国最大の植民地であったインドで活動した英人将校たち、特にサンデマン中佐の影響を指摘する¹⁹⁾。1877年から1892年までバルチスタンでの工作活動に従事したサンデマンは、部族との友好的関係の構築において部族を積極的に訪問し、その習慣、長老会議を最大限に尊重するというアプローチをとり成功をおさめた²⁰⁾。クラブがヨルダンで直面したアラビア半島の勢力との安定的関係の構築にはこのサンデマンが各部族の間に入って行なった調停作業の方法が引き継がれたのである。

当時英国の最大の植民地インド、その指令部たるインド政庁の対中東政策の重要性についてはこれまであまり関心が払われてこなかった。これまで英国の対中東政策の立案には司令塔たるロンドン（外務省、植民地省）と現地対策本部たるカイロ（アラブ局）の連携に注目が集まったが、20世紀初頭の英国の対外政策を語る上でインド政庁の存在感には計り知れないものがある。特にアラビア湾周辺地域の中東政策においてはそのイニシアチブをとってきたのはインド政庁であった。T.E. ロレンスがシリアで活動を続けていた1917年、イラクから後にサウジアラビア王国建国の父となるイブン・サウドのもとに派遣され、その力を正確に認識していたのは、ジョン・フィルビーであり、彼はもともとインド政庁からイラクの英軍に貸与される形で任務についていた²¹⁾。

インド政庁の対中東政策はロンドン、カイロ枢軸より正確な情報に基づいた現実的なものであった。英国の中東政策の破綻の発端は、インド政庁の専門家たちの意見を無視しイブン・サウドよりもメッカのフセインを支援したことにあるといわれる。実際フィルビーは、英国は、イブン・サウドを支持すべきであり、全アラビアは、早晚イブン・サウドの手中に帰するはずなのでただちに同盟を結ぶべきである、と主張した。これに対して、カイロのアラブ局は、イブン・サウドを支持せよなどという主張は、現状についての完全な無知に基づいており、英国は無知で狂信的なサウド一派ではなくハーシ

ム家を支持すべきである、というロレンスの主張に従った政策を具体化していくことになる²³⁾。フィルビーは、本国に愛想を尽かし、後にイブン・サウドの顧問としてその生涯を石油ビジネスの世界で送ることになる²³⁾。アブー・ディヤは、クラブの活動の中に直接インド政庁との連携を示すものを指摘してはいないが、バグダードにファイサルのイラク王国が建国された時、行政組織はインドから派遣された英国のエリート集団たるICS（インド高等文官）が担当し、インドルピーが通貨として使用されたこと²⁴⁾、すなわち「英国文民政府は、インドにおける行政経験に基づき形作られた思想と実践の明確な枠組を発展させていた」²⁵⁾ことはロンドンから派遣されたクラブのイラク内での活動に何らかの影響を及ぼしていた可能性を見ることができると。

6 ヨルダンに入るクラブ

クラブがなぜイラクを離れヨルダンへ向かったのか、アブー・ディヤは、その背景にはイラク政府と英国の不安定な関係とイラク石油のパイプラインの延長問題があったと考えている²⁶⁾。イラクは、英国にとってインド防衛上の拠点であり、また石油の安定供給を確保するための基地であった。英国がフランス、ロシアと秘密裏に締結したサイクス・ピコ協定を反故にしてまでも北部モスルを占領したのはその石油の確保のためであった。その石油をパレスチナのハイファまで送りだすためにはパイプラインを延長するとともに、それが通過するヨルダン砂漠内の治安確立が急務であった。クラブは、イラク勤務中にヨルダンへ入るという経験をすでに積んでいた。彼にとっては、次の仕事場としてより自由な活動領域が保証されるヨルダンを選ぶことは、自然なことであったのかもしれない。

1927年クラブがイラクにいたころフワイタート族のシャイフ、アッファーシュ・ラーイー・アルジャスワの掠奪行為に対して、クラブは彼らをヨルダンまで追跡し、彼らの武器をガソリンで焼きはらったことがあった。

当時ヨルダンやその周辺地域の部族の間には掠奪行為が頻繁に発生していた。砂漠の治安を乱すこうした掠奪を阻止するのがイラクの砂漠警察の任務であり、その活動はヨルダン人の間にも知れ渡るようになっていた。グラブは「ヨルダン人たちは私の部隊を見るとおどろいた。そして私に砂漠での部族間の掠奪をやめさせるため彼らのもとで働くよう提案した。それからすぐ、アブドッラー国王から丁寧な手紙が私に届いた。彼は個人的に私に手紙を書き、あの提案を確認した。私は、国王の呼びかけに応じヨルダンへ移ったのである」²⁷⁾。このようにグラブ自身は、アブドッラー国王の個人的な呼びかけがヨルダンへ移る契機であったことを明らかにしていた。

砂漠の遊牧民に関して我々は文化人類学的な視点からのアプローチに慣れ親しんでいるが、グラブの生涯においてそうしたアプローチは遊牧民を政治的、軍事的要因として活用するための一手段にすぎなかった。

アブー・ディヤはグラブの遊牧民対策に注目し、教育によって彼らに新しいアイデンティティが成長していく過程を明らかにしている。遊牧民は委任統治によって限定された国境に束縛されない生活空間を持っており、彼らと中央政府との間には常に緊張関係がただよっていた。トルコは約4世紀にわたりシャーム地域を支配したもののその支配は都市部に限定されていた。巡礼キャラバンやヒジャーズ鉄道など交通手段の発達に伴い、砂漠の治安確保には遊牧民の協力をあおぐことが不可欠であり、トルコはそのためにスッラ（金が入った袋）を支払い、安全を金で買う政策を採用した²⁸⁾。委任統治下において、英国は、例えばイラクにおいては有力部族のシャイフ（長）にムディール（地域の代表者）の称号を与え一定の俸給を支払うことによって遊牧民による統治を依頼した²⁹⁾。

ヨルダンの部族は、飼育する家畜の種類によって3つのグループに大別される。アスィール（血統を誇る高貴な部族）は、主にラクダを飼育して広い地域を移動する部族であり、シャワーヤ（小部族）は、主に羊やヤギを飼育し、比較的狭い範囲を移動する部族、最後は、ルアー（家畜所有者）で羊やヤギを飼育しつつも定住生活もする部族である。アスィールは他の部族や定

住民を保護の代償として一定の物資や金を受け取ることによって支配している。ヨルダンにおける代表的なアスィールは、ルワラ族、スィルハン族、バニー・ハーリド族、バニー・ハサン族、アドワン族、バニー・サフル族、バニー・アティーヤ族、ヒジャヤ族、フワイタート族などである³⁰。こうした部族の定住化政策が本格化するのは1950年代からになるが、グラブの活動はこの定住化政策の発端となったものであり、アブー・ディヤは、ヨルダンの政治、経済、社会体制、そしてその基盤となる教育体制の整備に関する貴重な記録を提示する。

グラブは、ヨルダン到着後さっそくそれまでヨーロッパ人が足を踏み入れたことがない地域へも偵察隊を派遣し活動を開始している。その土地に精通する部族から編成された偵察隊は、多くの成果をあげ、1932年、イラクやアラビア半島との国境地帯での部族間の掠奪行為は停止され、また国境検査官が任命されたことが記録されている。特に掠奪行為の基地として強固な防備を誇ったトバイク山の攻略と平定についてアブー・ディヤの記述は、グラブの部族民を率いる司令官としての力量と部隊編成に関する彼の基本姿勢を明らかにしている。グラブは、イラクでの経験を踏まえ、砂漠での部隊は、あくまでも部族民による編成を基本とし、そこに英人を任命することはなかった。しかしグラブの姿勢は砂漠の部隊をコントロールしたいと望む英国の意向と一致しない場合があった。アブー・ディヤは、グラブの指揮する部隊に配属された英国人は、グラブの意思に反して送り込まれたと判断している³¹。

7 グラブの教育政策

グラブは、1939年に前任者のピークから引きついでアラブ軍団の指令官となるが、それ以前の彼の活動の中核をなすのは、遊牧民の間に教育を普及させ、新しい世代に新たなアイデンティティを育成するという教育活動であった。砂漠の外交とアブー・ディヤが名づけた砂漠での教育活動は、グラ

ブの当面の目標と遊牧民への姿勢を明らかにすると同時にヨルダンにおける教育史の重要な側面を提示している。

グラブは、まずフワイター族から始めて、ヨルダンのすべての部族からシャイフの子供たちを徴兵する方策をとり、彼らを一つの部隊で一緒に生活させた。そして遊牧民が砂漠の治安確立のために誕生した砂漠軍に加わることを奨励した³²⁾。しかしその後の動きを見るとグラブの計画は望んだ形では進まなかったことがわかる。教育は、人間性を破壊する、教育を受けたものは、墮落したものである、と信じられていた部族に教育活動と学校の意義を理解させることは困難であった。しかしグラブは自らの資金で教師を雇い、1932年には雇れた教師がフワイター族の地域で教育活動に当たっていたことが確認されている³³⁾。こうした現実を前に、グラブはイラクで訓練した兵士たちから志願兵をつのらざるをえなかった。イラク時代の遊牧民コネクションの利用である。志願兵のなかには当時シリア砂漠を支配していたルワラ族の一員もいた。フランスはこの部族にはシリアへの出入国を自由に許していたためイラクのルワラ族には、シリアを経てヨルダンへ向かった人々もいた。こうして徐々に砂漠軍の核が編成されていった³⁴⁾。

なぜ遊牧部族民を自ら指揮をとる部隊の核とするのか、グラブは、4つの理由をあげている。

1. 都市民よりも部族を知っている。2. 都市民よりも道路を知っている。3. 掠奪における遊牧民の習慣と（掠奪者たちを）追跡することを知っている。4. 疲労や厳しい環境に耐え、戸外で眠ることができる。そのためわずかばかりの遊牧民がその倍の都市民を掠奪することができる³⁵⁾。

遊牧民へのシンパシーは、イラク時代に培われたものであるが、それが前述したように彼らを政治的、軍事的要因として活用するための現実的な手段となったのはヨルダンにおいてである。グラブはロレンスのように情緒的に、またフィルビーのように異端的には仕事をしなかったという指摘³⁶⁾もあるが、グラブ自身がこうした英人将校たちの活動を意識していたかどうかは不明である。

グラブの教育活動は学校の設置によってより具体的なものとなる。当時砂漠の遊牧民の間で教育を受けたものは1000人に一人といわれていた。ヨルダン政府は、移動学校を設置し、遊牧民の定住化を図り、その後の農業に従事させることを計画していた³⁷⁾。しかし移動する遊牧民をどう学校に結びつけるかが大きな問題であった。グラブは学校を移動学校と定住(内部)学校に区別することにした。最初の移動学校は、1934年に開校されている。一定地域内を遊牧民とともに移動するこの学校は、まずフワイター族の移動に適したガファルとムダッワラの間を行き来することになる。またアズラクとムワッカラの間を行き来する学校は、バニー・サフル族のためであった。グラブは、こうした学校で教鞭をとる教師たちの負担増に対して彼らの給与を上げることを教育省に当て手紙を送っている。1937年のこの手紙にはアラブ軍、砂漠地域司令部と記されており、グラブは自らを砂漠地域指令官として署名している³⁸⁾。

アブー・ディヤは、グラブが教育と学校建設を促した背景にはイラク石油のパイプライン延長問題があったことも明らかにしている。砂漠軍の発展と教育施設の整備はパイプラインの延長とともに進んだといってよい。イラク石油は、砂漠軍が運営する諸施設の費用を負担し、またそうした施設は、遊牧民に新たな仕事の機会を与えるとともに彼らの意識改革を進める拠点となったのである³⁹⁾。

砂漠軍指令官グラブが達成した砂漠の治安の確保は、工業、農業、運輸、衛生、などの国家としての基盤整備を可能とした。チャーチルが誕生させたヨルダンは、グラブによって国家として本格的な第一歩を歩み始めたのである。

終りに

『砂漠の支配者』の第1部は、ヨルダン軍創設にいたる過程をグラブとその前任者であるピークの具体的な活動を示すことによって明らかにしてい

る。アラブ軍という表現は、それがきちんと組織化され、機能的役割を果たすようになって初めて用いられるべき表現であるが、本書によって1930年代には砂漠部隊、砂漠警察にもその言葉が用いられていたことが判明した。またアラブ軍設立の目的は、まず砂漠での治安の確立であり、それは、イラク石油のパイプライン延長問題と密接に関連していたのであった。イラク石油の問題は、12世紀のザンギ朝以来歴史的シリア、シャーム地域にイラク北部が組み込まれていたことを改めて思い起こさせる。いわゆるシリアの分割は、シャームの歴史的連動性を無視した、あるいはその連動性を意図的に断ち切るための措置であり、トランスヨルダンの建国は、中東での権益を必死で保持しようとする英国が最後のあがきにも似た気持ちで打ち込んだ楔といえよう。

またアラブは前任地イラクでの経験を踏まえ、遊牧民との緊密な関係を構築することに力を注ぎ、アラブ軍を遊牧民の子弟からなる組織として成長させ、軍は、遊牧民の間に教育を普及させる施設としての役割を果たした。アブー・ディヤは、第1部をこうしめくくっている。「砂漠軍はその経験豊かな指令部によって砂漠での遊牧民の状況に適応することができた。そして軍事的な教養は、砂漠軍が遊牧民を結びつけるために、他方では、砂漠の子供たち（遊牧民）から生産的な国民を生み出すために採用した最もすぐれた外交手段であった」⁴⁰⁾

ヨルダンを初めとしてシャーム地域の国家形成には軍の機構や施設を通じた遊牧民の教育と彼らの新たなアイデンティティの形成が不可欠であった。軍は、以後基盤産業の確立や交通網の整備において主導的役割を果たしているのである。

註

- 1) abu-Diyah, saAd., *lurd al-SaHra'*, dar al-bashir Aamman, Jordan, 2009, p.12.
- 2) 筆者（新妻）はかつてシリアにおける歴史再構築委員会について書いたが、その後シリア人や周辺アラブ諸国におけるこうしたアラブ史をアラブ人の

視点で見直す試みについては継続的に論じることはなかった。今回アブ・ディヤの問題意識にふれることによりアラブ史の再構築へむけた地道な学術的努力の重用性を改めて確認することになった。新妻仁一「最近のシリアにおける歴史研究—アラブ史再構築委員会の活動を中心として」日本中東学会『日本中東学会年報2』1986年、462-482ページ。.

- 3) Simon,Reeva S(ed), *Encyclopedia of the Modern Middle East.vol-2*, Macmillan Reference USA,1996.,pp.711-712.
- 4) Shimoni,Yaacov(ed), *Biographical Dictionary of the Middle East*,Facts On File New York,1991,p.88.
- 5) ブノアメシヤン (河野鶴代、牟田口義郎訳)『砂漠の豹 イブン・サウド』筑摩書房、1975年、) 250-251 ページ。
- 6) abu-Diyah,*op.cit.*,pp.11-12.
- 7) スレイマン・ムーサー (牟田口義郎、定森大治訳)『アラブが見たアラビアのロレンス』リプロポート、1988年、iii ページ。
- 8) abu-Diyah,*op.cit.*,p.13.
- 9) ヨルダンの成立に至る英国の政策は、シャーム地域の政情と複雑に絡み合っ
て遂行されていくが、Wilson,Mary C, *King Abdullah.Britain and the making
of Jordan*,Cambridge University Press,1987と Salibi,Kmal,*The Modern History
of Jordan*.I.B.Tauris&Co Ltd,1993で概略を押さえることができる。
- 10) サルトは、バルカ地区の中心都市。当時人口は、約20000人、一方アンマン
は、当時コーカサスからの移民500人ほどを加えても2400人程度の寒村に
すぎなかった。20世紀初頭のトランスヨルダンの行政区分の変遷については
Wilson,*op.cit.*,pp.2454-56.と Salibi,*op.cit.*,pp.35-37を参照。
- 11) abu-Diyah,*op.cit.*,pp.19-22. さらにピーク (Frederick Gerard Peake,1886-1970)
については、トランスヨルダンに派遣される前、1908年から5年間、インド
に勤務した経験があることは、後述する中東とインドの関係という面から注
目に値する。またピークの自動車部隊がその名称をアラブ軍団と変えたのは
1923年9月とされる。「Frederick Peake」*Gale Encyclopedia of the Mideast
& N.Africa* www.answers.com/topic/frederick-gerard-peake(2011.2.14)
- 12) *Ibid.*,p.23.
- 13) *Ibid.*,pp31-32.
- 14) 萩野博『イラク王国』大空社、2008年(復刻版、初版は、1944年、東亜研究
所アジア学叢書180)、96-99 ページ。
- 15) abu-Diyah,*op.cit.*,p.24-25.
- 16) *Ibid.*,p.26.
- 17) *Ibid.*,p.28.
- 18) *Ibid.*,p.23.
- 19) *Ibid.*,p.61.
- 20) 浜渦哲雄『英国紳士の植民地統治』中公新書、1991年、125-126 ページ。

- 21) R.H. キーナン (岩永博訳) 『秘境アラビア探検史』 (下) 法政大学出版局、1994年、510ページ。
- 22) ブノアメシヤン (牟田口義郎訳) 『アラビアの王、ファイサル』 筑摩書房、1976年、21-22ページ。
- 23) 1933年半島東部ハサ地区でアメリカ探査隊が油層を発見すると、フィルビーは、ことの重要性を認識し、ロンドンに警告する一方、イブン・サウドには英国との利権交渉を勧めるが、イブン・サウドの要求した10万ポンドに対して英国(イラク石油)は5000ポンドを、それもインドルビーで提示したにすぎず、あきれたフィルビーは、本国と袂を分かち、カリフォルニア・スタンダードに接近し、同社は、6万5千ポンドで利権交渉を妥結させた。イブン・サウドは、「私は君(アメリカ)を選んだ。なぜならアメリカの会所は、イギリスの会社よりも政府に対して独立している。さらにアメリカは、イギリスよりもはるかに彼方にあり、わが国に何の政治的意図もこれまで持たなかったからである」と明言した。同書、49～52ページ。
- 24) 浜渦、前掲書、8-10ページ。
- 25) チャールズ・トリップ (大野元裕監修) 『イラクの歴史』 明石書店、2004年、62ページ。
- 26) abu-Diyah, *op.cit.*, p.28.
- 27) *Ibid.*, p.40.
- 28) *Ibid.*, p.46.
- 29) 荻野、前掲書、p.163. またシリアではファイサル政府が崩壊すると有力部族は、フランス支持の立場をとり、フランスはそのシャイフたちにバシャやアミールといったトルコ時代に用いられていた称号を与えて忠誠を示させた。都市や農村の民衆が反フランス運動を起こしてもこうした部族は運動に呼応せず傍観者の立場をとりフランスを側面から支持する結果となった。1920年以後フランスは、部族監視局を設置し、部族の直接管理政策をとった。訓練を受けた部族民によるラクダ部隊を編成しシリア砂漠のパルミラとデール・アッゾールに駐屯させ、部族間抗争の阻止やイラク石油のパイプラインの保護に当たさせた。zakariya, aHmad waSfi, *Aasha' ir al-sham*, dar al-fikr, 1983, pp.112-113.
- 30) Shoup, John, *Culture and Customs of Jordan*, Greenwood Press, London, 2007, p.6. ウィルソンは、アブドゥラー皇子に対する潜在的脅威として武装した各部族、フワイタート、バニー・サフル、アドワン、バニー・ハサンをあげ、これら部族の経済状況やアドワンとバニー・サフルの対立関係についてふれている。Wilson, *op.cit.*, p.57. またハリスは、主要部族を、ルワラ、バニー・サフル、フワイタート、シルハーンとし、部族の移動マップを紹介するなど、当時のヨルダンの部族社会の基本構造を理解するうえで有益な情報を提供している。Harris, George L, *Jordan its people its society its culture*, HRAF Press, 1958, pp.46-59. ヨルダンの部族に関して、その歴史、部族間抗争、軍事

的、社会的要因などについては、さらなる資料が必要になるが、アラブ人研究者の手によるものとしては、al-Aabbadi,aHmad Auwaidi, *al-Aasha' ir al-urdunniyah*,manshurat wizarat al-thaqafat wa al-funun,Aamman,1984. があり、その中でグラフの署名のある公文書もいくつか紹介されており有益である。

31) abu-Diyah,*op.cit.*,pp.59-65.

32) *Ibid.*,p.46.

33) *Ibid.*,p.69.

34) *Ibid.*,48.

35) *Ibid.*,50.

36) Robin,Philip, *A History of Jordan*,Cambridge University Press,2004,p.42.

37) abu-Diyah,*op.cit.*,p.67.

38) *Ibid.*,p.72-73.

39) *Ibid.*,p.75-78.

40) *Ibid.*,p.84.

Glubb and his time in Jordan: A Research note on "The Ruler of Desert"

Jinichi Niitsuma

This research note is to examine political situation of the eastern arab world and British foreign policies in the Middle East in the early 20th century through the activities of John Bagot Glubb, who was an British army officer in Jordan. He was a commander of arab legion and had organized the Jordanian army.

To study about Glubb, there is a book written by a Jordanian scholar, saAd abu-Diyah, titled " lurd al-SaHra' " in which he describes Glubb and his time in middle east in detail.

Prof. abu-Diyah had examined carefully various works and materials on Officer Glubb in the Middle East Institute of Saint Antony' s College in Oxford, UK. There are a vast collection of materials, including 18 boxes of papers on Glubb at the Institute.

After close examination, he had succeeded in an approach to history, political and international situation of the middle east and UK, and Glubb' s attitude towards the arabs. He has especially focused on Grab' s personality and his understanding about people, culture, history and politics of arabs.

This note is focused on the first part of the book, subtitled "The First step in Iraq" . As the book is considered to be a great value to researchers of the middle east, further studies have already been undertaken by the author of this note.

Not having attracted great attention of the world like T. E. Lowrence(Lowrence of Arabia), Glubb had worked hard with Arabic tribes in that time. He realized that the communication with tribes is one of the keys to control the politics and society of arab countries.

"The Ruler of Desert" is also considered to have introduced Glubb for the first time to the arab world, as well as the first book on the situation of Jordan and the Middle East in the early 20th century by the Jordanian scholar in Arabic.